

# 学校現場を支える希望研修のあり方

## —教科別研修から専門性向上研修へ—

教職研修センター 専門研修課

玉本 韶子 島田 敏寿 薬師 千春 塩谷 美穂

教師を取り巻く環境が厳しい中、学校現場に寄り添いつつ、新たな教師の学びをどのように支えていくか。この課題意識のもと、専門研修課は希望研修（教科別研修、通信型研修、訪問型研修）を運営してきた。本稿では、今年度の参加者の声や申込（視聴）状況、「研修後の振り返り」、「活用に関する振り返り」を元に、今年度の取組みの成果と課題を考察する。さらに、本研究所が実施している研修を体系化し、発展させた「専門性向上研修」における新しい試みについて報告する。

<キーワード> **希望研修、学校現場、研修の魅力化、専門性向上研修**

## I はじめに

教員の多忙化は教育現場で深刻な問題となっており、多くの教員が授業準備や生徒および保護者の対応、校務分掌等に追われ、研修に十分な時間を確保することが難しい状況である。しかし、それでもなお多くの教員は、教員としての使命感や誇り、教育的愛情をもって教育活動に当たり研究と修養に努めてきた。

近年、社会の変化が急速に進み、学校を取り巻く課題も複雑・多様化している中、学校や教員への期待はいっそう高まっており時代の変化に応じた高い資質能力を身に付けた教員が求められている。同時に、教員には、いつの時代も変わらず教科等に関する専門的知識や実践的指導力が求められている。

こうした現状を踏まえ、私たち専門研修課は、様々な機会を活用して学校の現状や教員の要望を把握し、教員が求めている研修の形（研修目標、研修内容、研修方法、実施時期等）を探ってきた。限られた時間の中で、少しでも多くの気付きや変化、学びを得て欲しい。新しい知識・技術を得るだけでなく、自らの教育実践と関連付けて考えて欲しい。このような思いの下、今年度は研修のあり方を常に見直し、必要に応じて修正しながら実施してきた。

## II 今年度の取組み

### 1 魅力的な教科別研修づくり

希望研修を魅力的なものにするために、教科横断型の研修や所外での研修を企画した。また、教員の力量形成に資する学びを支えられるように「フォローアップ交流会」を実施し、研修後の振り返りのあり方についても見直しを行った。

#### (1) 教科横断型の研修

中学校音楽科・高等学校芸術科音楽の研修講座にて、「伝統音楽の良さを味わえる授業づくりのためにI～能楽師に学ぶ～」というタイトルにて、国語科、社会科、英語科との連携を意識した教科横断型の研修を実施した。講座の目標は、「生徒が我が国や郷土の伝統音楽の良さを味わい、愛着をもつことができるよう、教師が伝統音楽に触れ、味わう機会を得る」「教科横断型の授業づくりの視点を得る」である。参加者は、学習指導要領における日本の伝統芸能の位置づけについて講義を受けたあと、仕舞、太鼓、謡すべての

基礎に取り組んだ。さらに能面を実際にかけたり、能楽師の仕舞を生で見たりする体験など、日頃できないような体験に緊張しながらも積極的に取り組んでいた。

参加者は24名で、うち音楽科17名、国語科4名、社会科2名、英語科1名であった。国語科では、中学校2年生の教科書に「敦盛の最期」が掲載されている。多くの授業では耳で平家物語を味わう機会は少なく、文字のみで読むことが多い。「国語教育と古典」

(『教育科学 国語教育 12月号』明治書院2024)において、菊野雅之氏は「平家物語は声の文学である。音読・朗読を通じて、文体そのものの魅力を体で感じとりつつ、内容の理解にも反映させるべき教材であることもたしかなことである。」と述べている。能楽師の手本に続いて何度も謡う中で、「謡に取り組むうちに、なんとなく意味が分かってきた」「繰り返し練習していると、気持ちよくなってきた」という参加者の声があった。生徒たちにとっても、謡として取り組み、声にして繰り返すことで内容の理解が進むと考えられる。「教室に能楽師を招待するということは難しいが、教員が知識経験として持っているということは大切だ」という声もあった。

演習の後、グループで「敦盛」を教材とした学習計画を立てた。グループには、様々な教科の教員が混ざって、それぞれの教科の立場からアイディアを出し合った。「謡の基本を学んだ後に謡風に会話する」など国語科では思いつかない実践が音楽科から提案されたり、逆に、「平家物語の他の文章も読んで、時代背景について理解を深める」など音楽の授業ではできないことが国語の授業ではできたりと、教科を越えて授業を考えていく過程によって、学びが広がり、深まる実感があった。総合的な学習の時間や探究活動、カリキュラムマネジメントにもつながる研修内容となった。

研修後の振り返りに「今後、他教科の先生方と連携しながら子どもの記憶に残る学びになるように、授業づくりを考えていきたい」「能は音楽だけでなく他の教科と共有できる。他の教科と共有しながら学ぶと生徒達の関心も高まると思う」などの記述があった。

しかし、「教科横断型」「どなたでも一緒に学びましょう」とチラシに記載しても、そもそも音楽科以外の教員の目に触れるることは少ない。また、中学校音楽科・高等学校芸術科音楽の研修講座に、音楽科以外の教員が申込むことは心理的にハードルが高いことだと



図1 太鼓の演習



図2 授業づくりアイディアの共有



図3 中学校音楽科・高等学校芸術科音楽配付チラシ

思われる。教科横断型の研修を企画・広報していく際には、教科の区別を取り払い、どの教科の教員でも申込みやすい仕立てにする必要がある。

## (2) 所外での研修

中学校美術科・高等学校芸術科美術の研修講座は、福井県立美術館および福井大学にて、また小学校家庭科の研修講座は、福井市地域交流プラザ AOSSA（以下アオッサ）にて、研修を実施した。

中学校美術科・高等学校芸術科美術の研修講座では、「STEAM 教育の要素を美術教育に取り入れ、生徒の主体性と創造力を引き出す授業設計ができる」を目標とし、鑑賞活動を生かした授業づくりを行った。午前中は、福井県立美術館特別企画展「古代エジプト美術館展」を鑑賞した。世界的にも貴重な遺物やミイラをはじめ、当時の流行を反映した装飾品や装身具など約 200 点が展示されており、参加者はペアになって生徒の課題につながるようなネタ探しを行った。午後からは、福井大学の講義室にて授業づくりを行った。参加者からは、「My 棺桶づくり」「美しいアーラインの描き方」「売れそうな首飾りづくり」などのアイディアが出てきた。

研修後の振り返りにおいて、「エジプト展に関しては、文化・素材・人物など様々な見方から歴史を覗いている感じがして面白かったし、そうした見方を自分なりに構成するというのが STEAM 教育的な要素に含まれるのかなと思った」「久しぶりに、自分が教科内容にどっぷり浸れて満足です」という記述が見られた。環境が変わることで気分転換もでき、学ぶ意欲につながったようである。

小学校家庭科の研修講座では、「実習を取り入れた研修により教員の授業力向上を図るとともに、『考える力を育てる』授業づくりができるようになる」という目標の元、調理実習を行った。本研究所にも調理実習室はあるものの、実習可能な人数を考慮して、所外施設を選択した。小学校の実情として、家庭科の授業は一部の教員しか担当しないため、調理実習の授業をしたことがないという教員もいる。今回の参加者の中にも数名、家庭科を担当したことがない、久しぶりに調理実習をしたという教員がいた。調理実習の前には、学習指導要領の解説や評価規準、家庭科授業のヒヤリハットを防ぐ安全指導など、豊富な経験に基づいた指導のポイントについて講義を受けた。午後からは、調理実習室にて炊飯の実習を行った。「研修後の振り返り」において、「家庭科をここまでじっくり考える機会や時間をとっていなかったので、今回の研修や先生方との対話してみて、子供たちの日常に繋げていくということの大切さを学んだ。出汁の違い、日常を疑うこと、学ぶことが多く、学校に帰って、クラスで考えていくのが楽しみになった。ワークシート作りも班の人と対話しながら視点を決めて作り上げた。他の班をみて、どこに視点を置くのか、どこを子どもたちに考えさ

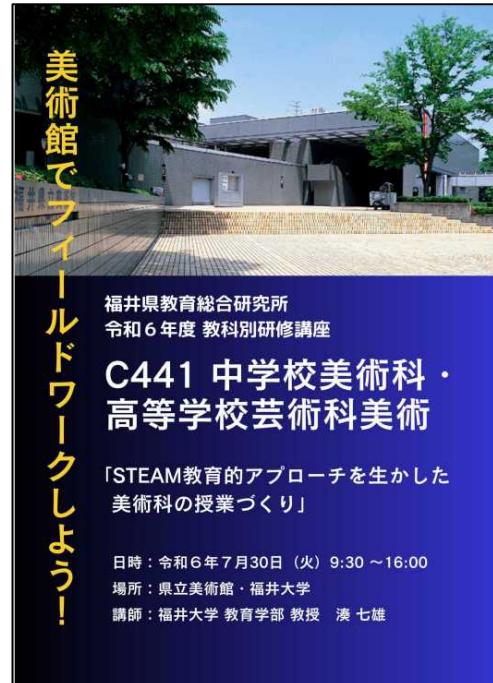


図4 中学校美術科・高等学校芸術科美術配付チラシ



図5 小学校家庭科配付チラシ

せたいのか。アプローチの仕方、家庭科の見方・考え方について学ぶことができた」という記述が見られた。満足度については、中学校美術科・高等学校芸術科美術は3.8、小学校家庭科は4.0と、大変高い値であった。今後も、フィールドワークや実技等が必要な研修については、研修に最適な会場を検討していきたい。

### (3) 研修後のフォローアップ

教科別研修の学びをその場限りのものにせず、日々の授業実践にいかにつなげていくかが、これまでの大きな課題であった。この課題を解決すべく、研修の振り返りにおいて二つの取組みを行った。

#### ア 事後アンケートから研修後の振り返りへ

昨年度までは研修終了後に、事後アンケートを実施していた。事後アンケートは、本研究所が参考にしたい意見や改善していくべき点を把握するということを主な目的としていた。しかし今年度、参加者を主語にした研修にするためには事後アンケートではなく、参加者自身の気付きや学びを振り返る必要があると考え、検討することにした。

「メタ認知を高め、自己調整力を育む『振り返り』を再考する」（「学校とICT」）において、前田康裕氏（熊本大学特任教授）は次のように述べている。「学びのために大切なのが『メタ認知』です。ご存じのとおりメタ認知とは、理解する・考えるといった自分の認知能力を客観的に認知する能力です。～中略～学習活動などの具体的な経験を、振り返りによって省察して言葉にすることで概念化し、次の試行につなげていくという経験学習モデルによって、自分の経験をほかの場面でも応用できるようになっていきます」

上記の記述は、生徒の学びについてのものだが、同じことが教員にも言えるだろう。そこで、事後アンケートを改め、研修後の振り返りに変更することにした。参加者主体の「学びの振り返りをしましょう。新たな気づきや考え方の変化、疑問などをご記入ください」をメインの問い合わせとした。記述式にした場合、参加者にとって面倒に感じられる可能性があり、回答してもらえないかも知れないという不安があったが、実際は丁寧に回答されていた。（参加者791人 文字数合計70,950字）内容については、気付きや考えの変容について記載されているものが多く（図7参照）研修後の振り返りが学びの深まりを促したことが推察される。

今後の課題は二つある。一つ目は、参加者に振り返りの意義について説明する必要があるのではないかということである。今年度は、振り返りについての説明がアンケートフォーム内の簡易なものだったため、「よかったです」「ありがとうございました」などの感想を書いて終わってしまう参加者もいた。（短文での回答51人）振り返りに記述する内容としては、抽象的過ぎるものや、具体的な活動内容の記録のようなものよりも、研修で得た学びや気付き、共に学び合った参加者の発言、次の学びへの問い合わせ、自身の学校や授業に結びついたものの方が学びに向かう力を育成する。今後は、研修後の振り返りを記入する前に、自己の学びのプロセスをメタ認知することの意義を説明することで、日々の授業実

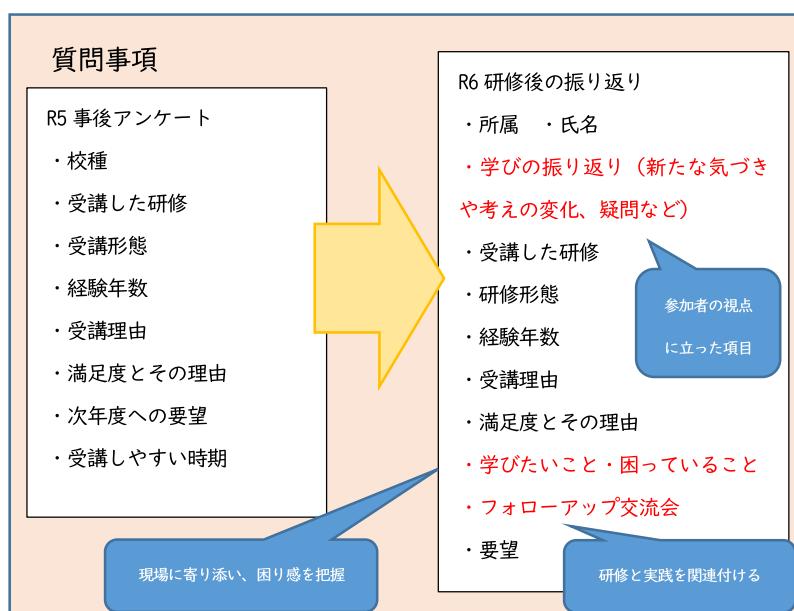


図6 事後アンケートから研修後の振り返りへの変更点

践に繋がるきっかけづくりとしたい。二つ目は、振り返りの時間の確保である。事後アンケートでは、質問のほとんどが選択式であったため、短時間で回答できたが、研修後の振り返りでは、その日の学びを振り返り、気づきや変容、今後の目標などを考えながら記入していくため時間がかかってしまう。そのため、終了時刻が過ぎても残って取り組んでいた参加者もいた。研修の流れを見直し、質問文を少なくする、質問文に複数の要素が入らないようにするなど、問い合わせの精選も考えながら次年度の振り返りの実施方法について検討していきたい。

なお、研修後の振り返りを総括した「教科別研修のまとめ」(図8)をホームページに掲載し、参加者が研修を振り返り、学んだことを意識できるよう情報提供も行った。

- ・図工の授業では、ただ児童に教材を与えて、教科書にのっているお手本のような物を作れれば褒めてあげる、そんなイメージで授業をしてしまっている自分に気付きました。学習指導要領にもあるように、知識・技能を主ではなく、自分が想像した通りに作れているか、など思考力・判断力・表現力に目を向ける科目だと知った。児童が自ら考え、工夫したい、やってみたいという環境を作れるように努めたい。そして、授業の中で「あ」が溢れ、児童と教師がお互いに新しい発見を共有しながら楽しめる授業を目指していきたいと思った。(小国)
- ・○○が大事！と教え込むのではなく、子どもたちの価値観のすり合わせ、価値観を広げることを通して、どんな○○ならいいのか、まで深く考えさせていきたいと思いました。今日の研修だけでも、たくさんの先生方の様々な意見があり、そこへ佐々木先生からの問い合わせがあったことにより、「そういう考え方もあるか～」「うーん、難しい。」となりました。実際の授業でも子どもたちがこのように思えるといいのだと感じました。子どもの思考を揺さぶるような問い合わせを頑張ってみたいと思います。(中英)

図7 研修後の振り返り一部抜粋

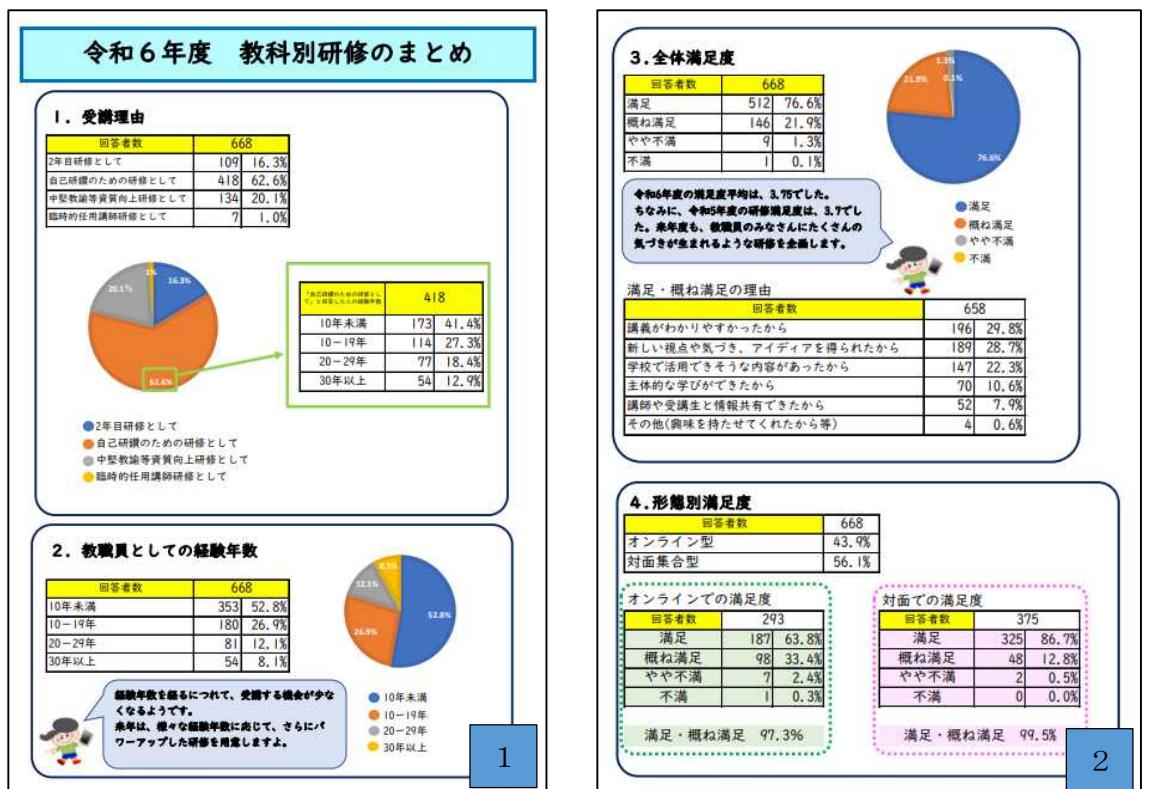
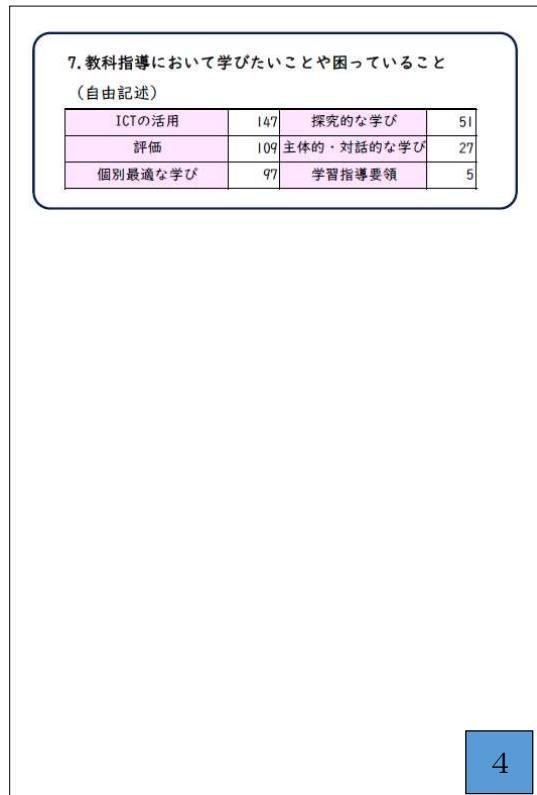
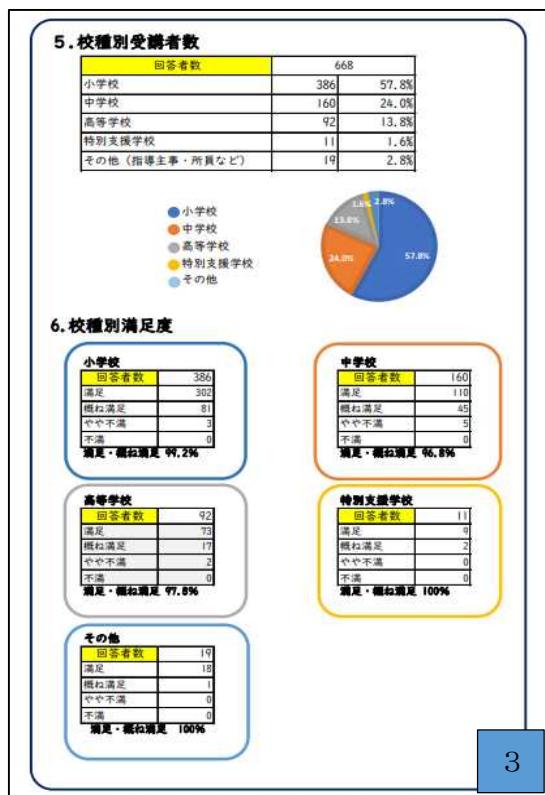


図8 令和6年度教科別研修のまとめ（1～4）



## イ 研修報告

これまで研修が終わった後には、研修の内容や様子、参加者の声などをホームページに掲載してきた。

しかし長文で記載しているため、余裕がないと読んでもらえていないのではないかという懸念があった。そこで、参加者が読みたくなるような研修報告を目指してチラシの型に変更し、色味を増やし文字数を減らした。変更したことによって参加者が研修報告を読む機会を増やし、研修内容を思い出して実践に繋げていくことを期待している。今年度の研修報告を見た方々からは、「見やすくなった」「良くなった」という評価をいただいている。専門研修課としては、さらに講師の発言や研修内容についても記載したいと考えているが、情報量が増えると読もうという意欲の低下につながるので、バランスを考えていきたい。

今後の課題としては、研修後に本研究所のホームページを開くこともなく、研修報告の存在すら知らないという参加者にどのように周知していくかということである。今年度は、ホームページへの掲載のみとしたが、次年度は、教員研修プラットフォームPlantのお知らせ通知機能を活用して、参加者に送付

**教育総合研究所**

**R6年度 教科別研修の報告をします！**

7/29 C401 小学校音楽科

「できる」を楽しむ音楽の授業づくり  
～デジタル教科書を活用して～

講師 戸田市立戸田第一小学校教諭 小梨 貴弘氏

音楽科の学びを進化（深化）させる「デジタル教科書」とwebコンテンツを実際に使ってみました。午後からは、グループでデジタル教科書を使った授業づくりを行い、発表と情報共有をしました。

**受講者の声**

・ICTを使ったたくさんの授業アイディアを知ることができました。ICT機器を使うことは自分にとってあまり浸透していないことだったが、もっと手軽に、気軽に使っていくといいのだと思いました。

デジタル教科書を使って、リズムパターンを組み合わせた創作・表現をしています。

**担当者の声**

デジタル教科書は使いやすく、授業の可能性を広げられることを実感できる研修でした。「デジタル」と「生の音楽体験」を授業の中で行き来しながら、子どもたちと一緒に学ぶきっかけになれば大変うれしいです。

図9 令和6年度研修報告

することも検討していきたい。また、ホームページ掲載箇所についても、現在は、研修案内の中にある教科別研修の中の…という具合に、目に触れにくい所に掲載されている。ホームページ内の項目の精選を進める中で今後は研修の振り返りとしてまた今後の研修受講の際の参考資料として、より多くの教員に見てもらえるよう、掲載方法について検討していきたい。

#### (4) フォローアップ交流会

令和5年度に、研修で学んだことを現場でどのように生かしたかを参加者間で共有し、更なる授業力向上を目指す場を設けるという目的で、中学校理科にてフォローアップ交流会を試行した。参加者は少なかったものの活発な意見交換ができ、充実した時間になったという声があった。これを受け、令和6年度は小学校国語科、小学校算数科、高等学校芸術科書道の三つの講座にて実施した。

フォローアップ交流会のねらいは、「教科別研修での学びを振り返り、その後の授業実践について情報共有し、更なる授業力向上を目指す」「気軽に話し合う機会をもつことで、教員間のつながりを深め、教科別研修での学びを広げる」というものであるため、実施時期は、教科別研修で学んだことを生かし2学期に実践して得た成果や課題を共有できる時期である冬期休業中の12月～1月とした。

小学校国語科のフォローアップ交流会では、「書くことが苦手な生徒が多いので、研修で紹介していただいたモデル文の提示という方法を実践したところ、書けるようになったが全員同じような作文になってしまった」という研修での学びを実践に取り入れたことで生まれた疑問が参加者から提起された。講師である水戸部修治先生（京都女子大学教授）からは、「子ども同士のペアワークを取り入れると、子どもそれぞれの書きたいことが次々と出てくる」「ペアワークの後に書くと同じような作文にはなりにくい」という助言をいただき、参加者からは「今後の授業改善において見通しを持つことができた」という感想があった。このように、フォローアップ交流会に参加することで、学びがブラッシュアップされたという事例もあった。



図10 小学校国語科フォローアップ交流会

今年度のフォローアップ交流会は参加者が少なく、小学校算数科は10名、小学校国語科は23名（訪問型研修三回目置き換えの味真野小学校14名を含む）であった。申込み締切りが迫っても一向に申込みがなく、Plantのお知らせ通知や電話にて受講を勧めてみたが、冬期休業中も多忙、または冬期休業中は休みたいという理由で参加を断られた。フォローアップ交流会の主旨からすると、実践し、生まれた気づきや新たな問い合わせについて参加者同士で語り合うという形があるべき姿だと思われる。しかし、参加者が少ないため活発な話し合いにはなりにくく、講師の話を聞く時間が多くなってしまった。今回のフォローアップ交流会の参加状況から、どんなに研修後の実践について情報を共有することが重要だとしても、多忙を極める教員には受講する余裕がないということが改めて分かった。一方で、少人数ではあるが、実践して生まれた疑問を共有したい、問題を解決したいと思う教員もいることも分かった。今後も、実践について教員同士で対話できる場や方法をすることが必要である。研修日にフォローアップ交流会への参加の意思を明確に持てもら

えるようなPRをするなどよりよい手立てを考え、参加者にとって実りがある、学校現場に寄り添ったフォローアップのあり方について検討していきたい。

## 2 個に応じた希望研修

### (1) 通信型研修

現在、講座数は109本あり、希望研修としての受講状況については、図11のとおりである。視聴者にとって魅力的な通信型研修はどのようなものであるかについて、現在検討を進めている。

所員からは、新たな学びが得られたり既存の知識を深めたりすることができる研修、最新の学びが得られる研修、分かりやすい内容、短時間で視聴することができる研修を求めているとの意見が挙げられた。

「令和の日本型学校教育を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて 審議まとめ」(令和3年11月15日中央教育審議会)にも、「質の高い有意義な学習コンテンツ」として「明確な到達目標と適切な内容を備えていること」「体系性をもって位置付けられ、レベルも整理されていること」「質の高い学習コンテンツが豊富に提供されていること」などの条件が述べられている。

現在、全通信型研修を視聴し、削除や編集が必要な動画の調査を行っているところだが、旧研修講座申込システムが紹介されている動画やアクティブ・ラーニングの名を冠した動画など古さが否めないものもある。今後実施される研修講座については、講師の承諾を得たのち、録画・編集・配信することを目標に、動画作成についての準備を進めている。また、NITSの優良な研修動画も活用しながら、学校現場のニーズに応じた、教員の資質能力の育成に資するような通信型研修になるよう改善に取り組んでいきたい。

教科別研修においては、研修を受講する前に関連する研修講座を実施要項に掲載し視聴を推奨していることもあって、7月と8月の視聴回数は他の月に比べて増加している。しかし、全体的に見て視聴回数は少ない。通信型研修そのものが認知されていないことも視聴回数が少ない原因の一つだと考えられる。豊富で魅力的な動画が配信されていても、認知されていなくては意味がない。今年度から視聴方法がPlantに変わったことによって、通信型研修の受講方法が分からぬという問い合わせや「通信型研修の存在を悉皆研修を受講する際に初めて知った」という声がある。これまで各学校に研修講座一覧表や案内を配付することはしてこなかったが、今後は、通信型研修の存在や視聴方法を教員に周知するため、Plantの活用方法について検討していきたい。

講座タイトル	R4	R5	R6年度										
	合計	合計	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計	
国語科（8講座）	590	638	16	9	14	127	47	0	0	5	6	224	
社会科（7講座）	246	304	9	7	10	33	27	0	0	0	2	88	
算数数学科（5講座）	299	333	6	5	12	30	31	0	0	4	9	97	
理科（6講座）	242	290	5	2	11	25	7	0	0	3	2	55	
音楽科・図工科・芸術科（9講座）	226	144	0	1	7	73	8	0	0	2	4	95	
技術・家庭科（6講座）	87	38	3	0	1	14	22	0	3	0	5	48	
外国語科・英語科（8講座）	277	217	10	16	10	65	13	0	8	5	4	131	
道徳科（2講座）	197	278	3	6	6	64	12	0	1	1	6	99	
総合探究（3講座）	106	48	5	4	3	5	5	0	0	0	3	25	
授業改善・授業全般（9講座）	1417	1647	10	12	15	14	17	1	1	1	9	80	
学校経営・教育相談（19講座）	2102	1438	92	105	24	64	48	5	4	12	22	376	
情報教育（7講座）	656	646	4	3	5	19	13	1	0	0	5	50	
社会人基礎力（2講座）	759	748	3	0	0	1	1	0	0	0	1	6	
学校改善（8講座）	795	1001	35	30	17	50	24	3	4	3	3	169	
組織運営（6講座）	296	258	12	16	8	6	77	1	0	1	2	123	
特別支援（4講座）	229	179	7	0	2	2	3	0	0	2	1	17	

図11 希望研修における通信型研修受講状況（述べ人数）

## (2) 訪問型研修

専門研修課は訪問型研修の窓口として、学校現場での困りごとや要望を聞き取り、研修を実施するのに最適な担当に繋げるというコーディネート業務を行っている。令和6年12月時点での実施状況は図12のとおりである。

訪問型研修に申し込む理由の多くは「今現在、困っているから」である。「生徒が文章を書けない」「学級活動において話し合いができない」という学校現場で共有されている課題があって、その解決を目指して、教員全員で語り合いたい、学びたいという強い要望によるものであり、年間を通して依頼が多い。

学校現場においては、いくら課題意識があっても、教員が集まって語り合うという時間はなかなか取りにくい。そのため訪問型研修では、所員が講義する時間は一部に留め、演習や協議を中心とした内容としている。協議の時間は、どの学校でも教員同士が活発に語り合い、いつも時間が足りないほどである。

訪問型研修のあるべき姿とは、学び合う学校組織への成長、組織の自走に向けたプロセスに伴走、支援することである。今後は、より質の高い深い学びのある研修を支援できるよう、訪問型研修のあり方を見直しつつ、学校現場の困り感に寄り添っていきたい。

内容	件数	受講人数
教科指導	134	891
学力調査	4	66
情報教育	193	1,230
教育相談・生徒指導等	241	3,153
理科何でも支援	8	298

図12 訪問型研修実施状況



図13 訪問型研修

## IV 今後の取組み

私たち研修運営側は、教員が学びに向かうその時に、新たな学びに参加しやすくなるような環境を整備し、質の高い研修を豊富に提供することが求められる。そのためには、研修の魅力化だけでなく、研修を体系化し、見える化することが大切だと考え、これまで本研究所の各センター・嶺南教育事務所がそれぞれで実施していた希望研修を「学習に関する研修」「生徒支援に関する研修」「学校運営に関する研修」の3つのカテゴリーに整理し、「専門性向上研修」として体系化する。

「学習に関する研修」においては、各教科の幅広い学びや教科横断的な学びを充実させるために、教科別の研修以外に「学習全般」を設け、どの校種、どの教科でも参加しやすいような仕立てとした。これは、中学校音楽科・高等学校芸術科音楽の研修を教科横断型と宣伝しても、音楽科の教員しか申込みがなかったことを踏まえてのことである。そして、生徒指導と学習指導の一体化という視点から研修講座「教育漫才」、今年度の研修後の振り返りの中の「学びたいこと・困っていること」として最も多かったICTに関する研修講座を「生成AIと学校教育のこれから」と題して実施する。

「生徒支援に関する研修」においては、これまで学校から依頼されるたびに教育相談センターが訪問型研修として実施してきた「福井県版ポジティブ研修」を「発達支持的生徒指導」として、「チーム学校で取り組む教育相談に関する研修」を「課題対応的生徒指導」として実施する。また、職務別選択研修として実施してきた「アラカルト研修」と各校の校内研修の学びをつなぐ「Best Mix」については「学校運営に関する研修」とした。

研修を体系化する過程では、嶺南教育事務所と協議を重ね、これまで嶺南教育事務所が主催してきた研修

(若狭地方教育委員会連絡協議会共催の研修等)を専門性向上研修として実施することとした。また、本研究所と嶺南教育事務所がそれぞれ企画、運営してきた教科別研修（小学校国語科、小学校算数科、中学校国語科、中学校数学科、中学校英語科 ※すべてオンライン型）を一本化し、研修一覧表や実施要項などについてもデータを共有することとした。このように連携して研修を企画・運営することが効率化を進め、お互いが持っている力を合わせることでよりよい研修を作っていくことも可能になる。削減できる業務や統合できる部分を今後も検討し、新しい試みやよりよい研修づくりに取り組んでいきたい。

研修講座を企画する上で意識したことは、研修申込みを検討する際の入り口とも言える、タイトルの吟味である。参加者の感想に「研修を受けてみると、とてもためになり、受けて良かったと思うが、申し込む気持ちになりにくい」というものがあった。タイトルには具体性を持たせ、研修に参加したくなるような工夫をすることで、参加者への意欲づけを意図した。「活用に関する振り返り」において、活用できなかった理由として挙げられていたのが、「研修内容と学校現場ニーズとの間にズレがある」という記述であった。こうした状況を踏まえ、学校現場で活用できる内容であるかをよく吟味した上で企画するようにした。また、研修の質においても、操作方法や知識を学んで終わりではなく、研修に参加した後の授業づくりや実践にどのように生かされるかまで視野に入れることを強く意識した。

現在、検討中の課題として、研修当日の進め方がある。これまでには講師紹介が終わった後、講師主導で進行し、講義が長く続く場合もあった。しかし、深い学びのためにには対話が必要である。今後は、研修の前には研修観の転換を促すような導入が必要ではないか、また演習や協議、振り返りをバランスよく組込む必要もあるのではないか、と検討している。そのためには、豊かな気付きが醸成される学びに向けて、研修運営側が研修の質の向上を図り、講師との綿密な打合わせをする必要がある。研修の運営方法については、よりよい形を検討し、実施していくと考えている。

教員は、悉皆研修や校内研修、また日々の実践を通して自らの課題に気づき、自己の専門性向上や力量形成に向き合うようになる。そうした教員一人一人のニーズに応えられるよう、今後も希望研修の周知と魅力化に取り組んでいきたい。

**令和2年度 専門性向上研修 一覧**

セミナー名	実施形態	日付	場所
C003 小学校国語科	オンライン	8月19日(火)	
C10 小学校社会科	オンライン	8月6日(水)	
C203 小学校算数科	オンライン	7月29日(火)	
C301 小学校理科	オンライン	8月6日(水)	
C431 小学校創造工作科	対面	7月22日(火)	周年実施予定
C601 小学校外国語①	対面	7月23日(水)	
C602 小学校外国語②	対面	7月23日(水)	
C002 小・中学校国語科と書道	オンライン	7月29日(火)	周年実施予定
C801 小・中学校理科①	対面	7月30日(水)	
C803 小・中学校理科②	オンライン	支那 8月1日(月)	
C103 中学校国語科	オンライン	8月27日(金)	
C113 中学校社会科	オンライン	9月30日(火)	
C213 中学校算数科	オンライン	9月19日(土)	
C313 中学校理科	対面	回数中 6月26日(火)	
C531 小学校技術科・産業教育とともにづくり	対面	終日 7月29日(火)	周年実施予定
C613 中学校国語科	対面	8月1日(木)	
C021 高等学校国語科	対面	7月31日(水)	周年実施予定
C121 高等学校社会科	オンライン	8月28日(月)	
C321 高等学校理科(物理)	対面	8月7日(木)	
C621 高等学校英語	対面	支那 1日(金)	周年実施予定
C901 小学校総合的な学習の時間	対面	7月31日(木)	
C902 運動×探究	対面	7月31日(木)	
C903 Art×探究	対面	終日 7月1日(金)	
C904 教育者オ	対面	8月6日(水)	
C905 ICT活用	オンライン	10月14日(火)	
C906 並行して実施して深い学びの推進と評議	オンライン	8月21日(木)	
C907 データサイエンス×探究・評議	オンライン	8月21日(木)	調整中
C908 データサイエンス×教育データ	対面	7月23日(水)	
C909 探究的な学び	対面	7月31日(木)	高専教育事務部文庫(岩野洋)
D001 高専教改実験セミナー実施プログラム(ビデオセミナー)	対面	AM 7月28日(月)	
D002 高専教改実験セミナー実施プログラム(ビデオセミナー)	対面	PM 7月28日(月)	
D003 高専教改実験セミナー実施プログラム(ビデオセミナー)	対面	AM 7月29日(火)	
D004 高専教改実験セミナー実施プログラム(ビデオセミナー)	対面	PM 7月29日(火)	
D005 高専教改実験セミナー実施プログラム(ビデオセミナー)	対面	AM 8月7日(木)	
D006 高専教改実験セミナー実施プログラム(ビデオセミナー)	対面	PM 8月7日(木)	
D007 高専教改実験セミナー実施プログラム(ビデオセミナー)	対面	AM 8月8日(金)	
D008 高専教改実験セミナー実施プログラム(ビデオセミナー)	対面	PM 8月8日(金)	
D009 高専教改実験セミナー実施プログラム(ビデオセミナー)	対面	AM 12月10日(金)	
N001 学びの集団①	オンライン	支那 5日(火)	高専教育事務部文庫(岩野洋)
N002 気になる子のサポート①	オンライン	8月22日(金)	高専教育事務部文庫(岩野洋)
D101 チームで取り組む教改実験開拓する研究会①	対面	AM 6月6日(金)	高専作にて実施
D102 チームで取り組む教改実験開拓する研究会②	対面	AM 7月1日(金)	高専作にて実施
D103 チームで取り組む教改実験開拓する研究会③	対面	AM 10月1日(金)	高専作にて実施
D104 チームで取り組む教改実験開拓する研究会④	対面	AM 11月7日(金)	高専作にて実施
D105 チームで取り組む教改実験開拓する研究会⑤	対面	AM 12月20日(水)	高専作にて実施
D106 チームで取り組む教改実験開拓する研究会⑥	対面	AM 2月13日(金)	高専作にて実施
D107 保護者との連携	対面	PM 7月22日(火)	
E001 校内研修活性化①	対面	AM 5月16日(月)	校長 助理 教諭 マキシムン研修実施担当者
E002 校内研修活性化②	オンライン	8月 8日(金)	校長 助理 教諭 マキシムン研修実施担当者
E003 校内研修活性化③	オンライン	8月 6日(金)	校長 助理 教諭 マキシムン研修実施担当者
E004 学校財務管理マネジメント	オンライン	5月26日(月)	校長 助理 マキシムン研修実施担当者
E005 カルチャーイングのためのクリエイティブシング	オンライン	5月26日(月)	校長 助理 マキシムン研修実施担当者
E006 学校危機管理	対面	AM 6月16日(月)	校長 助理 教諭 マキシムン研修実施担当者
E007 教育DXの推進	オンライン	11月26日(木)	校長 助理 マキシムン研修実施担当者
E008 学校改革	対面	10月 3日(金)	校長 助理 マキシムン研修実施担当者
E009 教育法規	対面	PM 4月12日(金)	校長 助理 教諭 マキシムン研修実施担当者
E010 子どもたちの暴力防止	オンライン	11月25日(金)	校長 助理 教諭 マキシムン研修実施担当者
E003 人権教育	オンライン	支那 6日(水)	高専教育事務部文庫(岩野洋)

図14 令和2年度専門性向上研修体系